

パリ万博「音楽展」における「オルフェオン」

The *Orphéon* Events at the Paris Universal Expositions

井 上 さつき

INOUE-ARAI Satsuki

Orphéon is a term which designates most of the chorale and instrumental (wind and brass) musical amateur ensembles in 19th Century France. The *Orphéon* movement was created by G. L. Bocquillon Willem, a strong advocate of the teaching of singing in schools, who first used the term for his choral group in 1833. The movement was rapidly developed in France throughout the century and by the turn of the century it reached a peak of popularity with over 1,000 societies in France.

In 1855, 1867, 1878, 1889, and 1900 when the Exposition universelle was held in Paris, the *Orphéon* events were always part of the exposition schedule. For the 1855 Exposition, two concerts showcased choral *Orphéon* Societies. The fact that Competitions and Festivals of choral and instrumental *Orphéon* societies were held as a part of the official musical events of great size from 1867 Exposition reflects their importance in the French musical life of that time.

This paper focuses on their Competitions and Festivals at the Paris Expositions and discusses their meanings.

キーワード：アマチュア音楽活動 合唱 吹奏楽 民衆 フランス

0. はじめに

19世紀のフランスは合唱大国であり、ブラスバンド大国であった。フランスでは、19世紀に都市部と農村部を問わず、オルフェオンと呼ばれるアマチュア音楽団体が多数結成され、活発な活動を行い、独自の音楽文化を創ったからである。活動の担い手が民衆層であったというところが、フランスのオルフェオンの一番の特徴である。そこには、一般に都市のエリート層による排他的な活動として始まったドイツのアマチュア合唱協会とはまったく様相を異にする音楽活動の実態があった。

近年出版された『19世紀フランス音楽事典』によれば、「19世紀フランスの合唱および器楽音楽のアマチュアのアンサンブルの大半を示すために固有の意味および総称的な意味の双方で用いられる名称」とある。これは、「オルフェオン」が固有名詞から総称名詞に変化したことを表している。時代的変遷をたどると、「オルフェオン」は当初ヴィレムが作った合唱団の名称だったものが、アマチュア合唱団全体に用いられるようになり、さらには、アマチュアの吹奏楽団や金管合奏（ファンファーレ）などの合奏団も指すようになったのである。

「オルフェオン」という名はもともとフランスにおけるアマチュア合唱運動の生みの親ともいえるギョーム・ルイ・ヴィレム（1781-1842、本名ボッキオン）が自分の合唱団につけたものである。彼は七月王政下の1833年、ヴィレムは小学校の卒業生を対象にした合唱団「オルフェオン」を結成。1835年には「ヴィレム・メソード」がパリ市立の学校に採用され、ヴィレムはパリの小学校音楽教育主事の地位についた。同年「オルフェオン」は労働者階級の男性のためにも門戸を開き、翌36年には、児童と成人男性のための、初の公的なオルフェオン組織「パリ市オルフェオン協会」へと昇格。パリ市庁舎で初コンサート開催し、成功を収めた。

1842年ヴィレムは世を去るが、その後、1852年、シャルル・グノー（1818-93）が音楽監督に就任した。グノーはローマ大賞受賞後の留学から帰国し、1851年オペラ座で《サフォー》を発表、新進作曲家として注目されていたところだった。グノーの監督就任以降、「パリ市オルフェオン協会」の名声は以前にも増して上がった。その後、歌劇《ファウスト》（1859）の成功により、オペラの作曲に専念する決意を固めたグノーはオルフェオンの監督を辞任。1862年には組織は二つに分けられ、セーヌ右岸地域を指揮者のジュール・パドルー（1819-87）、左岸地域をパリ音楽院の和声とソルフェージュの教授であったフランソワ・バザン（1816-78）に託された。1862年当時、「パリ市オルフェオン協会」は12,000人ももの団員を擁する大きな団体になっていた。

さて、ヴィレムが「オルフェオン」を作った1830年代、ほかのアマチュア合唱団体も増加し、その動きはパリ以外の地方にも広がり、業種ごとや職場の団体などさまざまな結びつきによる団体が生まれた。1850年から60年代にかけて、オルフェオンはさらに全国的に広がり、「オルフェオン」は総称名詞として使われるようになり、合唱だけでなく、吹奏楽団や金管合奏などの器楽の団体にも適用されるようになった。1851年からはコンクールが開かれ始めた。53年には、パリとセーヌ県の合唱団体連合が結成され、さらに、フランスのオルフェオン団体を後援する委員会が結成され、団体が全国規模で統括された。1855年すでにフランス全土で合唱オルフェオン300、器楽オルフェオン（吹奏楽団・金管合奏）400団体を数えた。

1855年6月10日、グレーの衣装に身を包んだパリ市オルフェオン協会のメンバー——1,500人の男性や子供たち——はシルク・ナポレオンの舞台に立ち、グノーの指揮でアンブロワーズ・トマの（1811-1896）《大規模な狩り *Les Grandes Chasses*》、フロマンタル・アレヴィ（1799-1862）の《鍛冶屋の歌 *Le Chant du Forgeron*》、アントワーヌ・クラピソン（1808-66）の《武器を取れ *Aux armes!*》を歌った。このコンサートには皇帝ナポレオン三世が臨席したこともあって、大勢の人々がつめかけた（Gumplowicz 1987: 89-90）。ナポレオン三世は、オルフェオンのもつ重要性を十分認

識していたのである。この年、オルフェオン運動はかつてない高まりを見せ、10月1日には、初の専門誌『オルフェオン』が創刊された（Gumplowicz 1987：63）。『オルフェオン』は2週間に一度発行されていた雑誌であるが、専門誌が発行されるほどの需要があったのである。しかも専門誌は『オルフェオン』誌だけではなかった。1860年『エコー・デ・ゾルフェオン』、1862年『ユニオン・コラール・ド・パリ』、1865年『ヴォワ・ド・ロルフェオン・フランセ』、1869年『ヌーヴェル・フランス・コラール』等、第二帝政下、オルフェオンの専門誌が続々と創刊されたのである（Pistone 1979：85）。

さて、こうして19世紀半ばに大きな組織となったオルフェオンの力を象徴するかのよう、19世紀後半にほぼ等間隔で5回開かれたパリ万国博覧会においてはオルフェオンのフェスティバルやイベントが「定番」イベントとして定着した。本研究では、1855年、67年、78年、89年、そして1900年のパリ万博におけるオルフェオンのイベントに焦点を当て、オルフェオンの実態とその意味を明らかにすることを目的としている。

1. 1855年第1回パリ万博における合唱オルフェオン

19世紀後半にパリで開かれた一連の万博のなかで、音楽が芸術の一分野として「音楽展」されるのは1867年の第2回パリ万博以降であり、その意味で、55年万博と67年以降のパリ万博とは決定的な相違がある。しかし、55年万博に音楽面で67年万博に通じる要素が見られなかったわけではない。というのも、第1回パリ万博では、会期の最後に行われた産業宮での閉会式・褒賞授与式がなかば大規模なコンサートとして企画されたからであり、さらにそれに続いて同じ会場で大規模な音楽フェスティバルが企画され、一連のコンサートが催されたからである。

しかし、1855年11月15日の閉会式・褒賞授与式とそれに続くコンサートは当時としては異例の規模をもち、音楽祭と呼びうる規模であった。11日間にわたり、オーケストラのコンサートや軍楽隊のコンサート、そして合唱オルフェオンの記念コンサートが合計10回にわたって行なわれたのである。

オルフェオンのコンサートは同一プログラムが違った団体によって2回演奏された。まず11月18日には、グノー率いるパリ・オルフェオン協会を中心に1,600人、さらに11月25日にはフランス全土とベルギーからさまざまなオルフェオンの代表が集まった。

実は、この2回目の全国規模のコンサートは、パリ合唱協会会長のユージェヌ・ドラポルト（1818-86）の呼びかけにより、急遽企画されたものだった。『オルフェオン』誌の11月15日号には、各地のオルフェオン団体の会長に宛てて、ドラポルトが書いた公開状が掲載されている。11月7日付けのこの手紙の中で、ドラポルトは11月15日の褒章授与式とそれに続くコンサート、特に11月18日に行われるパリ合唱協会とオルフェオン・ド・パリの混成による1,600人からなる合唱団によるコンサートについて述べ、大胆な提案を行った。その一週間後の25日にフランス各地と外国のオルフェオン団体を集めた大フェスティバルを産業宮で行い、一連の万博記念コンサートの締めくくりにしようというのである。

ドラポルトは各オルフェオン団体に対し、代表メンバーだけでも「団体旗と共に」パリに送るようにと呼びかけた。そして、オルフェオンのメンバーに対して鉄道の運賃を無料にする交渉がこのフェ

スティヴァルの責任者たちによって行われていると伝えた。また、参加意志を表明した団体に対してはすぐに人数分の楽譜が送られることになっていた。ちなみに、オルフェオン・フェスティバルに参加するメンバーに対する鉄道割引は、1867年万博で大がかりに行われることになる。

準備期間が明らかに不足していたにもかかわらず、ドラポルトの呼びかけに応じて、フランス国内からは67、ベルギーから29の合計96もの合唱団体が11月25日にパリに集結し、3,500人の合唱団員の歌声が会場となった産業宮に響き渡った。地方のオルフェオンの団員や隣国のオルフェオンの団員が大挙してパリにやってきたのは、これが初めてであり、大きな意味をもっていた。

グンプロヴィッツによれば、11月25日の万博でのオルフェオンのコンサートで演奏されたグノーやクラピソン、オベールなどの合唱曲からなる下記のプログラムは、それまで開かれていたオルフェオンのフェスティバルの曲目を継承するものだったという。このうち、クラピソンとオベールが当時の芸術アカデミー会員であり、ロラン・ド・リレ〔フランソワ＝アナートル・ローランの通称〕(1824-1915)とグノーはオルフェオンの歌う合唱曲の作曲家として頭角を現してきた若手の指導者であった。

・1855年パリ万博閉幕後のオルフェオン・コンサート曲目

英国国歌	《ゴッド・セーブ・ザ・クイーン》
ロラン・ド・リレ	《サン・ユベール <i>La Saint-Hubert</i> 》 《退却 <i>La Retraite</i> 》
グノー	《ガリアの酒 <i>Le Vin des Gaulois</i> 》 《オー・サルタリス <i>O Salutaris</i> 》 《皇帝万歳 <i>Vive L'Empereur!</i> 》
クラピソン	《武器を取れ!》
オベール	《ポルティチのもの言わぬ娘 <i>La muette [de Portici]</i> 》から合唱

このプログラムのなかでは、グノーが特別に書き下ろした合唱曲《皇帝万歳》が初演されたことが注目される。また、イギリスの女王がパリ万博を訪問中だったことから英国国歌もプログラムに入れられた。コンサートにはナポレオン三世やサルデニア王を始めとして2万人を越える人々が集まり、オルフェオンの歌声に拍手を送った (Gumplowicz 1987 : 95)。

オルフェオンが万博の記念コンサートの一環として登場したことで、オルフェオンはその存在を強烈にアピールし、注目を集めることになった。いわば公的なお墨付きを得たのである。万博全体の大きな目的のひとつは、民衆の啓蒙という点であったが、オルフェオンはこの点に見事に合致していた。このあと開かれるパリ万博で、オルフェオンの存在は一段と重みを増し、「音楽展」部門のひとつの柱として、フランス国内外からアマチュア合唱団を集めてコンクールやコンサートが大々的に催されることになる。

2. 1867年第2回パリ万博における合唱・器楽オルフェオン

(1) 合唱オルフェオンのフェスティバルとコンクール

1855年のパリ万博の後、オルフェオンをめぐる国際的な動きは加速し、1860年にはロンドンで英仏フェスティバルが開かれ、さらに1865年にはドレスデンで「第1回全ドイツ合唱団連合祭」が開かれている。このときにフランス側の代表として、リヨンから他の3人のメンバーと共に参加したのが、エミール・ギメ（1836-1918）である。ギメは、パリの「ギメ美術館」の収蔵品を収集した人物で、日本を訪れたこともあり東洋美術のコレクターとして知られているが、リヨンの実業家であり、率先してリヨンにオルフェオンを作った人物である。ギメはドレスデンで非常に暖かい歓迎を受け感激した。

さて、1867年第二帝政下で開かれた第2回パリ万博では「音楽」が芸術の一部門として認知され、特別なイベントが行われたが、そのなかに合唱も器楽も含め、オルフェオンのフェスティバルとコンクールはしっかりと組み込まれており、この後の1878年、89年、1900年の一連のパリ万博でもオルフェオンのイベントは必ず実行された。（ちなみに、一連のパリ万博では「オルフェオン」は一貫して合唱オルフェオンだけを指す言葉として使われ、器楽オルフェオンに関しては吹奏楽団と金管合奏という言い方がなされていた。しかし、本稿では、合唱オルフェオンおよび器楽オルフェオンとして表記する）このことから、合唱や吹奏楽団が19世紀フランスの音楽を代表する活動として認知されていたことがわかる。ちなみに1867年の年、文部省の統計では、フランス全国に3,243の音楽団体があった。これが1870年には総数7,000にまで増えている。すでに小さな村にまでオルフェオンは広がっていたのである。

さて、1867年の「音楽展」の開催が公表された1867年2月18日付のアレテ〔省令〕で、演奏委員会の第2セクションが合唱オルフェオンのフェスティバルとコンクールを組織することが決まった。この委員会のメンバーには作曲家のトマヤ、コーエン、指揮者のアンルなどが入り、書記にロラン・ド・リレが納まった。フランス国立古文書館に残っているロラン・ド・リレのオルフェオン関係の収支報告を見ると、25,500フランの予算に対し、支出は22,338フラン50サンチーム、差し引き3,161フラン50サンチームの残金が出ている。この「予算内に収める」才能をアピールすることによってロラン・ド・リレはその後の3回のパリ万博でもオルフェオンと自分の地位をしっかりと保つことになる。

さて、音楽による民衆の教化をねらっていた政府によって、オルフェオンはまたとない教育装置だった。1867年パリ万博の際に文部省が発行した教育関係の報告書によれば、公式の統計で、この年、3,243の音楽団体が存在し、90,522人の活動会員と56,977人の名誉会員がいたことがわかる（*Rapport 1867*: 148）⁽¹⁾。

では、オルフェオンを構成していたのは、社会的にどのような階層だったのだろうか。コメットンの本には、リヨンで開かれたオルフェオンのコンクールに集まった団員たちの職業を調査した表が載せられている。それによれば以下のとおりである（*Comettant 1869*: 64）。

労働者 3,068名；農民 920名；従業員 896名；実業家、商人756名；地主、金利生活者 394名；教授、教師、芸術家 312名；弁護士、公証人、医師、書記 296名；軍人 60名；

市・区・村長 41名；聖職者18名；侯爵1名；羊飼い 1名；上院議員1名

一見、オルフェオンの参加者が社会的に多様性に富み、さまざまな階層を含んでいるように見える。しかし、一般に、民衆的な団体というものは「より上の階層のメンバーを数人必要としている。彼らは法律的・知的な助けとなり、出資者となり、当局に保証金を払う」ものである（Gumplowicz 1987：126）。したがって、名誉会員と実際に活動している一般会員との混同は避けなければならない。こうしてみると、コメツタンが掲げている表からも、オルフェオンの一般会員は、従来音楽活動とはあまり縁のなかった労働者や農民、従業員など、社会の低い階層に集中していたことがうかがえる。オルフェオンの活動こそは、民衆の啓蒙を旗印にした万博の理念にぴったり合致するものだった。

また、オルフェオンの役割は民衆に音楽を広げるだけではなかった。1867年の万博報告書の中で音楽教育について述べたロラン・ド・リレは、相互扶助の組織として機能しているオルフェオンについて言及している。それによれば、そうした組織のなかには貧窮者に対して6年間に14,000フランの援助を行なった団体があること、また、綿業危機に際しては、ノルマンディとアルザスの労働者にオルフェオンのコンサートの収益で、総額10万フランの義援金が送られたこと、そして、フランスのオルフェオンが過去10年間に慈善事業に使われた金額は150万フラン以上に見積もられると述べている（*Rapport 1867*：148）。

「音楽は個別に励む場合は芸術のひとつに過ぎないが、みんなで実践すれば道徳の学校になる」とはオルフェオンの活動に特に肩入れしていたコメツタンのことばだが、コメツタンに限らず、音楽が一般大衆を道徳的に啓蒙する有用なものだという思想は当時広く普及していた。

オルフェオンの活動の広がり背中を押されるようにして、1860年代、文部省も唱歌教育に本腰を入れるようになった。1863年から69年にかけて文部大臣を務めたヴィクトル・デュリュイ（1811-1894）は64年、小学校教員養成学校と小学校における唱歌教育の現状に関するアンケートを実施し、1865年1月30日、小学校教員養成学校とリセの学生に唱歌教育を課すアレテを出した。これによって唱歌は、小学校教育養成学校においては週5時間、リセでは4年生のクラスまで週2時間の必修科目となった。また、それ以上の学年については、週1時間自由選択科目として定められた。このアレテは、小学校教員養成学校においてはかなり実行されたが、リセにおいては校長の理解を得られないことが多く、広く実現されるには至らなかった（Gerbod 1983：37-40）。

したがってオルフェオンのメンバーは（器楽オルフェオンのメンバーも含め）音楽教育を受けたことがないものが大半を占めたため、楽譜を見ても音を取ることができなかった。しかも彼らはソルフェージュの基礎を学ぶことを嫌がったため、音楽的な水準はなかなか向上しなかった（Gerbod 1983：30）。

1867年万博では、合唱オルフェオン関係のイベントのために25,500フランが投じられ、7月に数々の催しが企画された。主要なイベントは通常行われているオルフェオン・フェスティバルに準じたものだったが、規模は国際的で、フランス国外からはベルギー、プロシア、英国、スイスからオルフェオンが参加した。一方、一般展示の第10グループ「民衆の肉体的・精神的生活条件を改善するための

製品」の中にオルフェオンも入り、オルフェオンの活動のための楽譜や楽器、旗などが展示された。

オルフェオンの役割を高く評価していた組織委員会は、万博に参加する全国のオルフェオンのメンバーに対してさまざまな便宜を図った。彼らには格安の宿が用意され、鉄道の割引が行われた。その割引率は鉄道会社や距離によって異なるが、通常運賃の4割から最大で7割5分引きという超破格値だった (*L'Echo des Orphéons* : 20 juin 1867)。さらに、参加者に対しては、パリと博覧会の地図、安価なレストランやホテルのリスト、さまざまな特典のついた個人カードが配られた。こうして全国各地からオルフェオン団員が首都パリをめざして続々と集まってきた。その数、約5,000人。参加したオルフェオン団体は220を数えた⁽²⁾。

これらの特例措置を見ても、組織委員会がオルフェオンについては積極的に支援していたことが分かる。

なお、オルフェオンに関してはフェスティバル・コンクールのほかに、オルフェオン関連の資料の展示も行われ、ロラン・ド・リレのもとに証書（ディプロマ）、規約、規則等が各地から集められた (*L'Echo des Orphéons* : 5 dec. 1867)。

フェスティバル・コンクールでは、内容面ではコンクールに、今回から「初見」演奏がとりいれられたのが注目される。コンクールは2つの部門に分かれていた。ひとつは優秀団体を集めた「国際コンクール」であり、もうひとつはフランス国内の一般のコンクールで、こちらは5つの部門に分かれていた。日程は下記のように定められた。

- 1867年7月5日 第1回フェスティバル
- 7月6日 フランス国内のオルフェオンのコンクール
- 7月7日 第2回フェスティバル
- 7月8日 優秀団体を集めた国際コンクール
- 7月9日 賞牌授与式（兼フェスティバル）

しかし、オルフェオンのフェスティバル自体は、聴衆を集めることはできなかった。例えば『ルヴュー・エ・ガゼット・ミュージカル』は、7月5日のフェスティバルについて、事前に売れたチケットは53枚だけで、無料のチケットが大量に出回ったにもかかわらず、会場に集まった観客は8,000人に過ぎなかったと報じている (*RGMP* : 14 juillet 1867)。前回の1855年パリ万博時には同様の催しで2万人を集めたことを考えれば、この人数はいかに物足りない。その記事では「合唱音楽が民衆のモラルの向上と教育に役立つことは疑いないが、合唱音楽は自らにしか興味をもっていない」と書かれている。また、会場の音響効果が悪く、音が吸い込まれてしまうことも問題だった。

7月6日に開かれたフランス国内の団体を対象にしたコンクールは能力別に5つの部門に分かれていた。コンクール自体については、フランスの優秀部門 *division d'excellence* と国際コンクールに関してだけは万博にふさわしいと評された。国際コンクールに参加する団体は母国語で2曲を演奏することになっていた。そこにはパリ、リール、マルセイユ、リエージュ、ロンドンなどの優れた団体が

参加した。審査員は数多かったが、その中で、ビゼーやサン＝サーンスなどの若手作曲家の名前が見られるのが興味深い。

一方、7月5日と7月7日の2回行われたフェスティバルは、ジョルジュ・アンルの指揮、パリ・ギャルドの協力（パリ・ギャルドが第1部と第2部の間で演奏を披露）により、以下のプログラムを演奏した（*L'Echo des Orphéons* : 20 juillet, 1867、図7参照）。

・1867年万博合唱オルフェオン・フェスティバル曲目（7月5日&7月7日）

第1部

- ①《ドミネ・サルヴム *Domine Salvum*》 ②トマ：《平和の聖堂 *Temple de la Paix*》
③ラモー：《夜への賛歌 *Hymne à la Nuit*》 ④グノー：《ガリアの酒》
⑤F.ダヴィッド《祈り *Invocation*》 ⑥ロラン・ド・リレ：《村の婚礼 *La Noce de Village*》

第2部

- ⑦マイヤベーア：《アフリカ女 *L'Africaine*》から「水夫の合唱」
⑧アレヴィ：《ジャガリータ *Jaguarita*》
⑨ロラン・ド・リレ《闘技場での殉教者たち *Les Martyrs aux Arènes*》
⑩トマ：《そり *Les Traîneau*》 ⑪ボイエルデュー：《二夜の笑話 *Fabliau des Deux Nuits*》
⑫アダン：《鉄床（かなとこ） *L'Enclume*》

小曲が数多くプログラムに上がっているが、そのほとんどは、それぞれの部門（ディヴィジョン）の課題曲となっていた曲だった。それぞれの曲は全員で歌われるわけではなく、その曲がコンクールの課題曲とされたディヴィジョンによってのみ歌われたが、それらの団体はアンサンブルとして訓練されていないため、演奏は決してすぐれたものではなかった（*RGMP* : 21 juillet 1867）。

(2) 「裏」フェスティバルの存在

万博の報告書の中には合唱オルフェオンのコンクールとフェスティバルについて簡単に述べられているが、その中にまったく出てこない事実がある。「音楽展」の一部として実行されたオルフェオン・フェスティバルとは別のオルフェオン・フェスティバルが2つも並行してパリで開かれていたことである。

ひとつは、ドラポルトが芸術協会 *Association artistique* の会長テロール男爵とともに企画した、国際的なオルフェオン・フェスティバル「フェスティバル＝コンクール・ユニヴェルセル」である。英仏フェスティバルの後、ドラポルトの勢力は衰え、彼はオルフェオン団体の指導部から排除された。しかし、ドラポルトは自分自身で別の団体を作り、活動を続けていたのだった。彼は1866年6月16日付「オルフェオン」誌上で67年のオルフェオン・フェスティバルのプランを発表し、準備にとりかかった。つまり、「音楽展」のプランが決定する以前の話である。その後、「音楽展」にオルフェオン関係のイベントが入ることがわかって、ロラン・ド・リレとドラポルトは両者の催しを融合さ

せず、それぞれが独自に計画を進めたため、この年パリでは国際オルフェオン・フェスティヴァルが複数開かれるという事態になった。

この「フェスティヴァル＝コンクール・ユニヴェルセル」は、8月25、30、31日に行われ、さらに、『フランス・コラール』誌が企画した「フランス・コラール国際コンクール」が8月1日に開催されたこともさらに事態を複雑にした。ちなみにどちらのコンクールも広義の意味でのオルフェオンであり、吹奏楽やファンファールなど器楽の団体も含まれていた。実は当時、器楽も含め、広義の意味でのオルフェオンのコンクールとコンサートは非常に盛んに行われていた。吹奏楽関連に絞っても1867年に、30もの大小のイベントがフランスで開催されたという。そのうちの3つが、パリで7月と8月に連続して行われ、そのひとつが万博関連のものだったわけである (*L'Instrumental* : 30 nov.1867)。

このように同種の企画が乱立するなかで行われたパリ万博のオルフェオン・フェスティヴァルが成功するはずがなかった。当然、なぜ一緒に開催できなかったのか、という声も上がったが、国が管轄した万博のオルフェオンのイベントの褒賞授与式(7月9日)にはナポレオン三世と皇后をはじめ要人たちが出席したことは注目される。宮廷は喪に服していたが、それでもなお、皇帝と皇后が二人揃って出席したことは、オルフェオンに対する宮廷の強い思い入れが現れていた。優秀賞は皇帝みずから授与し、参加したオルフェオン団体にはすべて記念メダルが与えられた。民衆のための音楽には、中身を問わず、国家がバックアップするという印だった (Comettant 1869 : 183-184)。

(3) 器楽オルフェオン(アマチュア吹奏楽団と金管合唱)のフェスティヴァルとコンクール

オルフェオンに続いて、アマチュアの吹奏楽団と金管合奏のフェスティヴァルとコンクールが行われた。こちらオルフェオンと同じく、一般大衆の啓蒙をめざして全国で展開されていた運動だった。「音楽展」の委員会としては、演奏委員会の第3部門が、このアマチュアの吹奏楽と、軍楽隊のイベントの両方を扱った。予算は合わせて45,500フランだった。

アマチュア吹奏楽団については、25団体、3,000人のアマチュア演奏家が7月14日に産業宮で行われたフェスティヴァルに集まった。聴衆は約10,000人だった。興味深いのは、そのうち半数は「新ディアパゾン *Nouveau diapason*」に基づく楽器で、残りの半数は「旧ディアパゾン *Ancien diapason*」に基づく楽器を使用していたが、両者は一緒には演奏できないので、それぞれ別の曲を吹いたという点である。1859年、フランスは他国に先駆けて標準ピッチ(摂氏18度で1点イが毎秒435ヘルツ)を採用し、以後、楽器は新しい標準ピッチに合わせて製造されるようになった。新ディアパゾンの楽器とはその標準ピッチを採用した楽器のことだと考えられる。

フェスティヴァルで演奏された9曲は以下の通りである。このうち「旧ディアパゾン」の楽器で演奏されるものがメンデルスゾーン《結婚行進曲》など5曲、「新ディアパゾン」の楽器で演奏されるものがワーグナーの《ローエングリン》の合唱やマイヤベーアの《預言者》から行進曲など4曲という構成になっていた。アマチュアの吹奏楽団や金管合奏で使用されている楽器は旧来のタイプがまだ多かったわけである。また、帝国委員会の第3セクション(金管合奏、吹奏楽、軍楽隊)の書記をつとめていたエミール・ジョナスの作品が2曲も入れられているのは一種の「役得」といえよう。な

お、曲目中の〔旧〕は旧ディアパゾン、〔新〕は新ディアパゾンを指す。

・1867年パリ万博・吹奏楽フェスティバル曲目（7月14日）

- ①メユール：《ジョゼフ *Josef*》から「祈り」〔旧〕
- ②オバール：《ポルティチのもの言わぬ娘》抜粋〔旧〕
- ③グルック：《アルチェステ》から行進曲〔新〕
- ④メンデルスゾーン：《夏の夜の夢》から「結婚行進曲」〔旧〕
- ⑤ヴァーグナー：《ローエングリン》から合唱〔新〕
- ⑥E. ジョナス：凱行行進曲《勝利 *La Victoire*》〔新〕
- ⑦ロッシーニ：《モイーズ》から「祈り」〔旧〕
- ⑧マイヤベーア：《預言者》から行進曲〔新〕
- ⑨E. ジョナス：《ダイヤモンド *Le Diamant*》序奏とギャロップ〔旧〕

当時は楽器の改良が日進月歩で進んでいた時代で、万博や国内博では楽器産業が次々に新しい楽器を出品していた。旧来の楽器を使っていたアマチュア演奏家は、仲間の新しい楽器の実際の演奏を聞き、また産業展示の「楽器」部門で新しい楽器をながめた。楽器産業にとっては新しい楽器の需要を掘り起こす大きなきっかけになったことは確かである。ちなみに、1878年万博では、旧ディアパゾンの話はまったく出てこないことから、その間に新旧の楽器の入れ替えが完了したらしいことがわかる。

1867年7月14日のフェスティバルの翌日と翌々日に、さまざまな等級のコンクールが行われ、吹奏楽団と金管合奏それぞれのグラン・プリが決定した。吹奏楽団のグラン・プリはリールとトゥルコワンの団体が受賞し、一方、金管合奏については楽器製造業者アドルフ・サックスの職場のアンサンブルが受賞した。しかし、サックスの楽団のアンサンブルの受賞に関しては、「アマチュア」という立場から問題になった。例えば、サックスの商売敵でもあるゴトロ *Gautrot* 社から出版されていた吹奏楽やファンファールの専門誌『アンストルマンタル』に編集長のコワイヨンは次のように書いている（1867年7月20日号）。

なぜ、教授や傑出した演奏家で構成されているアドルフ・サックス氏の楽団を「コンクール無審査 *hors concours*」にしなかったのか。1等の発表に際しては、野次と口笛が飛び交った。これは実際、このメーカーの異論の余地のない優秀さを示すための商業的な手段でしかなかった。そのため聴衆は正当に、演奏に対して喝采を送ったと同じだけ激しく、褒賞を野次ったのである。

3. 1878年第3回パリ万博における合唱・器楽オルフェオン

今回1878年万博もロラン・ド・リレがイベントを取り仕切り、7月21日、22日、23日の3日間にわたって、オルフェオンのフェスティバルと国内コンクールおよび国際コンクールが、8月25日、26日、27日の3日間にわたって器楽オルフェオン（吹奏楽団と金管合奏）のフェスティバルと国際コ

ンクールが開かれた。

これらのイベントでは、会場となったトロカデロ宮ホールの入場料は1フラン均一に設定され、平均して客席の8割がたが埋まる（3,463席）というまずまずの入りで、入場料の売り上げは平均3,000フランだった（*Rapport administratif 1878*, 1 : 612）。

(1) 合唱オルフェオンのフェスティバルとコンクール

音楽専門誌によれば、7月21日の合唱オルフェオンのフェスティバルにはフランス国内から「上級セクション」と「優秀セクション」に属す約2万人が参加した（*RGMP*, 28 juillet 1878, および *Mén*, 28 juillet 1878）。演奏曲目のうち、ロラン・ド・リレの《エジプトの息子たち *les Fils d'Égypte*》、テオドル・スメ Th. Semet の《聖ジュリアン *la Saint-Julien*》、グノーの《兵士の合唱》、ドリープの《奇跡横町 *la Cour des Miracles*》の4曲はアンコールされ、トマの《チロル *le Tyrol*》⁽³⁾、F. ダヴィッドの《夜の歌》、ブルゴー＝デュクドレーの《わが祖先 *Nos Pères*》も成功を収めたという。コロヌが指揮台に立ったが、グノーやトマやブルゴー＝デュクドレーの作品の演奏の際には、それぞれ作曲者に指揮棒を渡した。また、フェスティバルにはギャルド・レピュブリケーヌも参加し、セレニックの指揮で2曲演奏した。

7月22日には、フランスの合唱オルフェオンの国内コンクールが開かれ、初見部門と演奏部門に分かれてコンクールが実施された。翌23日には外国の合唱オルフェオンのコンクール⁽⁴⁾と国際コンクール、そして賞牌授与式が行われた。審査委員長はトマだった。国際コンクールの結果は、上級部門の1位がリールの団体、2位がブリュッセルの団体とハーグの団体、3位がル・アーヴルの団体だった。また、混声合唱セクションでイギリスの団体が1位となった⁽⁵⁾。

一方、オルフェオンの4,000人のメンバーは、6月30日にパリ市が外国からの賓客のために開いた「グランド・フェット・ナショナル」にも300人の演奏家たちとともに参加した。合唱指揮はダノゼールが、オーケストラの指揮はコロヌが担当した。曲目には、フランスの作品だけでなく、メンデルスゾーンの《ローレライ》やリストのハンガリー行進曲、ウェーバー（ベルリオーズ編曲）の《舞踏への勧誘》など、さまざまな作品が並んだ。コンサートの中ではバザンがヴィクトル・ユゴーの詩に曲付けした《フランスに栄光あれ *Gloire à la France*》の美しい合唱が特にすばらしく、拍手が長く続いたという⁽⁶⁾。グノーはオルフェオンのフェスティバルのために新曲《フランス万歳 *Vive la France*》を大急ぎで作曲した。これはポール・デルレード（1846-1914）⁽⁷⁾の詩によるもので、多忙なグノーはこの作品のオーケストレーションをアンドレ・ヴォルムゼル（1851-1926）に任せたと報じられている（*Mén.* : 7 juillet 1878）。

万博の「音楽展」における合唱オルフェオン関係のイベントは、公的なものであったにもかかわらず地味な印象を与える。報告書にも非常に簡単な記載しかない。これは、当時、オルフェオンの活動が順調に広がっていたことを考えると不思議であるが、実は、1867年パリ万博時と同様に、1878年パリ万博の際にも合唱オルフェオンの「裏」フェスティバルが大々的に開かれていたのである。「裏」フェスティバルのひとつは、専門の音楽雑誌『オルフェオン』紙の主催によるもので、万博の公的

なオルフェオンのイベントのわずか1週間に、三日間にわたり開かれた。こちらでも国際コンクールが開かれ、コンクールはパリ中のあらゆる演奏会場を使って行われたばかりでなく、フェスティバルはチュイルリー宮殿の庭で大規模に行われたという (RGMP, 14 juillet, 1878)。こちらのフェスティバルとコンクールは全段階を網羅していたので、参加人数も多かったことは理解できるとしても、オルフェオンの世界では、万博の「音楽展」がもっていた「公的 officiel」なオーラはほかの部門に比べて明らかに弱かったように思われる。これが一体何に起因しているのかは今の段階では不明である。

(2) 器楽オルフェオンのフェスティバルとコンクール

一方、器楽オルフェオン（吹奏楽団と金管合奏）のフェスティバルとコンクールも合唱オルフェオンのイベントに準ずる形で開かれた。フェスティバルは1878年8月25日にトロカデロ宮ホールで約1,600人の演奏者を集めて行われ、アルバン Arban の指揮で、多数のグループが交代にさまざまな性格の作品を演奏した (RGMP, 1^{er} septembre 1878)。RGMP に曲目として挙げられているのは、エロールの《[ル]・プレ・オ・クレール》序曲、ロッシーニの《ギョーム・テル》序曲、ラモーの《カストールとポリュックス》の編曲、グルックの《アルミード》の編曲、メンデルスゾーンの《夏の夜の夢》の行進曲などである。間奏としてオルガンがギルマンによって演奏され、プログラムに彩りを添えた。オルガンではマルティーニのガヴォット、そして吹奏楽や金管合奏によって演奏されたばかりの主題を使った即興が行われ、大喝采されたという。

翌日と翌々日はオルフェオンと同様に、「上級」セクションと「優秀」セクションのみのコンクールで、審査員にはトマ、グノー、サン＝サーンス、マスネ、ブルゴー＝デュクドレー、コロヌ、ドリーブ、ギルマン、ジョンシエール、ニコライ・ルビンシテインをはじめとする有名な作曲家や演奏家が顔を揃えていた。

「上級」セクションの課題曲はジラル編曲によるドリーブの《シルヴィア》で、各団体はそのほかに1曲自由曲を演奏したが、それらは吹奏楽用に編曲されたメンデルスゾーンの《宗教改革》であるとか、ベートーヴェンの《田園交響曲》などであったという (Mén. 1^{er} septembre 1878)。曲目から見る限り、かなり高度な演奏水準であったことがうかがえる。国際コンクールではルベール Roubaix の団体が1位を獲得した⁽⁸⁾。外国の団体としてはベルギーの参加があったが、詳細は不明である。

4. 1889年パリ万博における合唱・器楽オルフェオン

続く1889年パリ万博でも「音楽展」が企画され、その中で合唱・器楽オルフェオンのフェスティバルとコンクールがいつもの万博と同様に行われた。

(1) 合唱オルフェオンのフェスティバルとコンクール

第2セクションの委員会が統括した合唱オルフェオンのコンクールとフェスティバルはまったく慣例どおりの内容であった。取り仕切るのはこの万博が3回目の経験となるロラン・ド・リレである。内容は、(1) 非公開で行われる初見演奏の審査、(2) 演奏の審査、(3) フェスティバルであった。1889

年8月11日と25日に開かれたコンクールには3,206人が集まり、3,500フランの収益があった。

1889年8月11日、トロカデロ宮で開かれた合唱オルフェオンのフェスティバルには1800人以上の合唱団員が集まり、大成功を収めた (*Mén*: 18 août 1889)。出演者を舞台に乗せるにも、舞台を広げなければならなかったが、聴衆も多く、階段栈敷 (アンフィテートル) の一番上の段まですし詰めになっていたという。

フェスティバルでは、元ギャルド・レピュブリケーヌの指揮者、ポーリュスの指揮するボン・マルシェ [デパート] 吹奏楽団が協力した。歌手たちはオペラ座指揮者のヴィアネージによる「的確で明快で見事な指揮」により歌った。プログラムは以下の通りだった。6,000人以上が集ったこのフェスティバルは文字通り熱狂に包まれたとのことである。

・1889年8月11日 合唱オルフェオン・フェスティバル曲目

- ① 《ラ・マルセイエーズ》
- ② サン＝サーンス：《ケルモールの船乗りたち *Les Marins de Kermor*》
- ③ グノー：《ガリアの酒》
- ④ ドリーブ：《傭兵たち *Les Lansquenets*》
- ⑤ ロッシニ：《ギョーム・テル》から三重唱 (合唱で演奏)、レシタティブはオペラ座歌手による
- ⑥ トマ：《夏の夜の夢 *Songe d'une nuit d'été*》から「森番の合唱」
- ⑦ ロラン・ド・リレ：《カラミンスカヤ *Karaminskaia*》
- ⑧ ラモー：《すばらしい平和 *Paix charmante*》
- ⑨ マスネ：《エロディアード》から「ローマ人たちの合唱」

なお、1889年6月16日にはトロカデロ宮ホールでセーヌ県 (ソーとサンドニ地区) の小学校の男女児童850人がロラン・ド・リレの指揮で歌うイベントがあった。参加者はセーヌ県の小学校で音楽教育を受けている8,000人の児童から選抜されたメンバーで、8つのコーラスが伴奏付や無伴奏の作品を歌った (*Mén*: 16 juin 1889)。「安上がりで済む」このイベントは1900年パリ万博でもそっくり再現されることになる。

(2) 器楽オルフェオンのフェスティバルとコンクール

第3セクションの委員会が統括した器楽オルフェオン (金管合奏と吹奏楽団) のコンクールとフェスティバルに関しては、例年とは少し内容が異なり、1) 初見演奏のコンクール、2) 演奏のコンクール、3) トロカデロのプロムナード、4) フェスティバル、5) 提灯行列 (での演奏) であった。つまり、アマチュア演奏家が公の場で演奏する機会が増えたわけである。こちらは2,180人が参加した。

このうち、金管合奏と吹奏楽団のフェスティバルは1889年8月18日に、次のようなプログラムで

開かれた (*Mén* : 18 août 1889)。

・1889年8月18日 器楽オルフェオン(金管合奏と吹奏楽団)のフェスティバル曲目

第1部: ①アレヴィ: 《アンドールの谷》 *Le val d'Andorre*

②ビゼー: 《アルルの女》から前奏曲と間奏曲 ③F.ダヴィッド: 《砂漠》の回想

④レイエール: 《シギユール *Sigurd*》幻想曲

第2部: ①グノー: 《ミレイユ》にもとづく幻想曲 ②ベルリオーズ: 《ハンガリー行進曲》

③トマ: 《ハムレット》からバレエ ④エロール: 《ザンパ》序曲

⑤《ラ・マルセイエーズ》

この曲目は、4月末に発表されていた曲目と若干異なることが注目される。発表されていたのは、メユール、オベール、マイヤベーア、ロッシーニ、アレヴィ、ベルリオーズ、F.ダヴィッド、トマ、グノー、レイエール、サン＝サーンス、ドリーブ、ビゼー、マスネの15曲であったが (*Le Figaro* : 30 avril 1889, *Mén* : 5 mai 1889)、実際の本番では最初の4人とサン＝サーンスが削られた。その中に、二人の外国人が入っていたので(マイヤベーア、ロッシーニ)最終的にはアレヴィ(1799年生)以降のフランスの作曲家に限定した内容になったわけである。

(3) 市民吹奏楽団国際コンクール

一方、第3セクションと第4セクションの委員会が共同で企画した市(町村)吹奏楽団と外国の市民吹奏楽団の国際コンクールが1889年9月16日に開催された⁽⁹⁾。1889年万博においては当初、国際軍楽隊コンクール開催が予定されていたが、フランス革命百周年を記念して開かれる万博であることから公式参加を見送る国が多かったため、軍楽隊のコンクールを開くことは難しかった。そこで、パリ万博に国家として正式に参加していない国であっても、市民の団体であれば参加が可能だという理由で、市民楽団による国際コンクールの開催が決まったのが、参加したのは以下の6団体(フランス4、ベルギー2)にとどまった (*Mén* : 15 septembre, 22 septembre 1889)。

1. アルマンティエール(ノール県)市民楽団 *Musique municipale d'Armentières*

ベートーヴェン: 交響曲二長調から第1楽章

2. ルーズ・フィラルモニック(ベルギー) *Phiharmonique de Leuse*

ベートーヴェン: 交響曲第3番《英雄》から第1楽章

3. マルシエンヌ＝オ＝ポン吹奏楽協会 *Société d'harmonie de Marchienne-au-Pont*

マスネ: 《エリーニュエス *Les Erinnyes*》

4. ランス市民楽団 *Musique municipale de Reims*

メンデルスゾーン: 交響曲《宗教改革》からロマンスとフィナーレ

5. レヌ市民楽団 *Musique municipale de Rennes*

ベートーヴェン: 序曲《フィデリオ》

ヴィダル：演奏会用ポロネーズ *Polonaise de concert*

6. リール定住砲手楽団 *Musique des canonniers sédentaires*

ピゼー：序曲《祖国》

当日は最初に、ギャルド・レピュブリケーヌと参加団体あわせて700人以上がヴェトジュの指揮で《ラ・マルセイエーズ》を奏し、次にギャルドだけで、ベルギー国歌が演奏された。

大賞 5,000フラン、2等賞 3,000フラン、3等賞 2,000フラン、4等賞 1,000フランの賞と、それぞれ外務大臣から贈られる美術品が用意された。審査員は第3セクションと第4セクションの委員から構成され、その数は47人を下らなかった。その中にはルヌヴー、ジョンシエールなどの作曲家、ヴィアネージ、ラムルーなどの指揮者をはじめ、当時の第一線の音楽家が数多く含まれていた。審査委員長はトマが出席できなかったため、ドリーブがつとめた。

審査の結果、大賞が《ロマンス》とメンデルスゾーンの《宗教改革》交響曲のフィナーレを演奏したランス市立楽団に授与された。2等賞はリールの楽団、3等賞はレンヌの楽団、4等賞はベルギーのマルシエンヌ・オ・ポン吹奏楽協会に贈られた。この日の収益はアントワープの大災害の義捐金として同地に送られた。

今回の市民楽団による国際コンクールは結局、国際コンクールと銘打ちながらも、フランス以外はベルギーからしか参加団体がなく、完全な企画倒れに終わった。

5. 1900年パリ万博における合唱・器楽オルフェオン

オルフェオン、金管合奏、吹奏楽のフェスティバルとコンサートは1867年以来、パリ万博には欠かせない伝統的なジャンルであったことは、これまで見てきたとおりである。フランスでは19世紀後半、アマチュア音楽運動が民衆の間で非常にさかんになり、その数は20世紀初めにフランス全土で1,000団体に達した。しかし、芸術的な水準は概して凡庸で、19世紀後半になるほど、「芸術音楽」との距離は開いていった (Gumplowicz 1987 : 214)。

1900年パリ万博では、外国からウィーン・ジグアアカデミーをはじめ、多くのアマチュアのすぐれた合唱団体が訪れコンサートを開いたが、フランスのオルフェオンと比較して論じた音楽批評はまったく見当たらない。両者は完全に異なるジャンルとしてみなされていた。

今回の万博でも、合唱オルフェオンと器楽オルフェオン（金管合奏、吹奏楽）のフェスティバルとコンサートは完全に前例に従って組織された。この委員会の構成メンバーは、以下の通りだった (*Rapport générale 1900*, 6 : 128-129)。芸術局官僚 1、パリ音楽院教授 1、音楽教育視学官 2、ギャルド・レピュブリケーヌ指揮者 1、ギャルド・レピュブリケーヌ元指揮者 1、作曲家 12、書記 1。

コンサート委員会と比較してみると、この委員会にはパリ音楽院の教授が1名だけしか加わっていないこと、また、学士院芸術アカデミー会員がまったく含まれていないことが分かる。すなわち、「芸術音楽」とオルフェオン等の音楽が重なる要素がこれまでの万博に比べてもさらに少なくなったことがよく表れている。実際のメンバーは以下の通りだった。

J. ピゼー（書記）、ポルド、カエン、カノビー Canoby、シャピユイ Chapuis（報告者）、コカール、ガスティネル、ジョナス、ルフェーブル、ルルー、マレシャル、マルモンテル、パレス Pares、ペサール、ヴェッケルラン、ヴェトジュ（副委員長）、ヴォルムゼル、ウディノ Oudinot、ロラン・ド・リレ（委員長・歌唱視学長官）

さまざまなイベントが行なわれたが、内容的には毎年のフェスティヴァルやコンクールと大差がなく、万博ならでの試みはほとんど見られなかった。この部門全体での支出は21,136フラン20サンチーム。入場料は1フランと0.5フランに設定され、平均入場者数は1,787人という結果になった（*Rapport générale 1900*, 6:145）。5,000人収容のホールの約4分の1しか埋まらなかったことになる。

(1) 合唱オルフェオンのフェスティヴァルとコンクール

合唱オルフェオンのフェスティヴァルは1900年7月22日開催された。ダンベの指揮により、百貨店「ボン・マルシェ」の合奏団が協力して、総計1,800人以上の参加者が集まった（*Id.*）。ここでは以下のように、デュボア、マスネ、ロラン・ド・リレ、サン＝サーンス、そして16世紀のシャンソンが歌われた。そのシャンソンはアンコールされたという。過去の音楽への興味が高まるに従って、オルフェオンのレパートリーにも変化が現れてきたことがわかる。

・1900年7月22日オルフェオン・フェスティヴァルの曲目

①ミュレ氏によるオルガンのアントレ

a. メンデルスゾーン：前奏曲ハ短調

b. ヴィドール：《サンフォニー・ゴシック》からアダージョ

②ロラン・ド・リレ〔編曲〕：《マルセイエーズ》合唱、オルガン、「ボン＝マルシェ」合奏団

③ブルゴー・デュクドレー：《シルヴェストリク *Silvestrik*》

④マスネ：《モワヌとフォルバン》合唱のための

⑤ロラン・ド・リレ：《アヘン吸引者たち *Les Fumeurs d'opium*》

⑥グノー：《ファウストに基づくモザイク》管楽合奏のための

⑦マレシャル：《仲間たち *Nos Compagnes*》合唱のための

⑧デュボワ：《自然の声》合唱のための

⑨ a. 作曲者不詳《ギーズ公のシャンソン》

b. ラモー：《夜への賛歌》

⑩サン＝サーンス：《冬のセレナード》

⑪ガスティネル：《ル・グレーヴ》合唱、管楽合奏、オルガンのための

翌23日、フランスの17団体が参加してコンクールが開催された。審査委員長はサン＝サーンスだった。優秀部門ではヴァランシエンヌの団体 *Les orphéoniste valenciennois* が、上級部門ではポーの団体 *La Lyre Daloise* が受賞した。外国のオルフェオンもボヘミアと英国から参加した。それに先立ち、

1900年6月10日には マチネ・ミュージカルが開かれ、委員会委員長ロラン・ド・リレの指揮により、ソーとサン＝ドニ地区の学校から参加した900人の児童が演奏した。7月8日には、パリ市オルフェオン（3500人の大人と子供、男女、A. シャピユイ指揮）によるマチネが開かれた。

(2) 器楽オルフェオンのフェスティバルとコンクール

器楽オルフェオン（金管合奏と吹奏楽）に関しては、1900年8月15日、まず 国際フェスティバルが パレス（ギャルド・レピュブリケーヌ指揮者）の指揮によって行なわれ、翌16日、フランスの5団体が参加してコンクール、さらに、17日と19日にもフェスティバルが行なわれた。また、7月には2度にわたり、軍楽隊フェスティバルが行なわれた。

このようにオルフェオン、金管合奏、吹奏楽に関して、さまざまなイベントが実施されたが、その中で新しい試みは一切行われなかった。1900年万博の「音楽展」について鋭い批判を行った「X...氏」はこのセクションの委員会についても、次のように批判している（X., 1901 : 116-119）。それによれば、この委員会はオーケストラ・コンサートと同様の使命をもっていたはずで、曲目についてもフランス音楽史を展示するような、すべての「時代」を代表する作品を選ぶべきであったというのである。「X...」氏によれば、3万フランの予算がオルフェオンだけに使用できることが分かっていたにもかかわらず、委員長ロラン・ド・リレはセーヌ県のオルフェオンを使えば安上がりであると提案し、それが採用されたという。委員会内部では、オルフェオンによって「歴史的コンサート」を企画できるという考えはまったく浮かばず、曲目選定に当たって、フランス音楽史という観点はほとんど無視されてしまった。結局、委員会は1889年の規則をひとつひとつ検討し、少々修正を加えるにとどまった。しかも、参加団体の枠を広げることさえ行なった。そして、コンクールやフェスティバルの細則の検討に多くの時間を費やし、選曲の理由は示されなかった、というのが「X...」氏の主張である。

確かに、参加団体の枠については、その水準を維持するため、優秀団体を絞り込む必要があるというのが、89年の公式音楽プログラムについての反省点となっていたが、それと逆行する措置であった。ただし、曲目選定については、実際には、16世紀のシャンソンや18世紀のラモアの作品が取り上げられていたことは注目すべきであろう。1824年生まれのロラン・ド・リレはすでにこのとき75歳になっていた。第1回パリ万博の時から一貫してオルフェオンの第一人者として活躍し、万博時のフェスティバルやコンクールを率いてきた彼だったが、その経験を生かして、各回のプログラムの内容を変化させていったり、改良しようとした様子はほとんど見られない。いかに安上がりにつつがなくイベントを実行するか、ということだけがロラン・ド・リレの関心事だったように見える。

6. 結論

19世紀のフランス音楽史において、オルフェオンが果たした役割はまだ完全には解明されていない。しかし、オルフェオンは公的に広く認知されていたことは確かであり、その表れのひとつが、今回焦点を当てた万博の「音楽展」におけるオルフェオンのイベントであった。パリ万博で、オルフェオン

関連の予算はオーケストラのコンサート等に比べると概して少なく、さらに「裏」フェスティバルとの競合などもあり、オルフェオンのイベントはつねに成功を収めていたとはいえませんが、オルフェオンが「音楽展」の当初から予定に組み込まれる存在であったことは注目する必要がある。

ラジオもレコードもなかった時代、19世紀後半のフランスで、多くの労働者や農民の男性が、自ら音楽の実践活動を行い、楽しみ、多くのメンバーがパリ万博の音楽イベント等に参加していたことは、当時の音楽生活を考える上で重要なポイントとなるだろう。オルフェオンの活動の中で、そのメンバーは編曲であれ、抜粋であれ、さまざまな形で、当時人気を博していた作品に接していた。当時、オペラ座やパリ音楽院演奏協会といった超一流の演奏を提供する場実際に身をおくことができたのは一部の上層ブルジョアや貴族だけであったかもしれないが、ほかの階層も、オルフェオン等の音楽の実践活動を通じて、芸術音楽にもかかわっていた。つまり、あらゆる階層が広い意味で芸術音楽に接し演奏に参加する機会があり、そこに、フランス独特の音楽文化のあり方が形成されたと考えられるのである。

参考文献

- Commettant, Oscar, *Musique et Musiciens*, Paris : Pagnerre, 1862.
- Commettant, Oscar, *La musique, les musiciens et les instruments de musique chez les différents peuples du monde*, Michel Lévy, 1869.
- Dictionnaire de la musique en France*, sous la direction de Joël-Marie Fauquet. Paris : Fayard, 2003.
- Di Grazia, Donna Marie, *Concert Societies in Paris and Their Choral Repertoires c. 1828-1880*. dissertation WashingtonUniversity, 1993.
- Ellis, Katharine, *Interpreting the Musical Past : Early Music in Nineteenth-Century France*, Oxford 2005.
- Gerbod, Paul, « L'enseignement de la musique en France au XIXe siècle, dans les établissement d'instruction publique » in *L'Education musicale en France—Histoire et méthodes—*Paris : Presse de l'Université de Paris-Sorbonne, 1983 : 33-46.
- Gerbod, Paul, « Vox Populi » in *La musique en France à l'Epoque romantique*. Paris : Flammarion 1991 : 231-256.
- Guimet, Emile, *Cinq jours à Dresde (Juillet 1865)*, Lyon : Imprimerie d'Aimé Vingtrinier, 1865.
- Gumplowicz, *Les travaux d'Orphée, 150 ans de vie musicale amateur en France—Harmonies-Chorales-Fanfares—*Paris : Aubier, 1987.
- Pistone, Danièle. *La Musique en France de la Révolution à 1900*. Paris : Honoré Champion, 1979.
- Rapport sur l'Exposition universelle de 1867 à Paris* (par Frédéric Le Play). Paris : Impr. nationale, 1869. [*Rapport 1867*]
- Rapport administratif sur l'Exposition universelle de 1878 à Paris* (par Jean Baptiste Krantz). 2 vols, Paris : Impr. nationale, 1881. [*Rapport administratif 1878*]
- Exposition universelle internationale de 1900 à Paris, Rapport général administratif et technique par M. Alfred Picard*. 8 vols, Paris : Impr. nationale, 1902-03. [*Rapport général 1900*]
- L'Echo des Orphéons* (1861-1905)
- L'Instrumental : Journal des sociétés philharmoniques, d'harmonie militaire et de fanfares* (1867-1939)
- Le Ménestrel* (Paris : Heugel, 1833-1940)
- La Revue et Gazette Musicale de Paris* (Paris : Schlesinger, 1835-45, Brandus, 1846-80)

Le Figaro

ウィリアム・ウェーバー『音楽と中産階級——演奏会の社会史』城戸朋子訳、東京：法政大学出版会、1983。

笠羽映子「エミール・ギメと音楽(2)」、『比較文学年誌』第27号、平成3年、210-236頁。

註

- (1) ロラン・ド・リレが執筆した「音楽教育についての報告」の部分に記載されている。
- (2) 272団体がフェスティバルに参加、150団体がコンクールに参加したという記述もある。*L'Echo des Orphéons*, 20 juillet 1867 に転載された *L'Art musical* の記事による。なお総数は5,000人強と書かれており、人数的には一致する。
- (3) これは *RGMP* の記事による記載。*Mén.* では《サバトの夜 *la Nuit du Sabbat*》と記されている。
- (4) ただし、参加団体はオランダの団体のみであったらしく、*Mén.* では、「オランダの団体のコンクール」と記載している。
- (5) 正式の団体名は以下の通りである。上級部門 *1er prix*, *la Société des Orphéonistes lillois*; 2^e *ex aequo*, *la Société chorale de Bruxelles et la Cécilia de la Haye*; 3^e *la Lyre havraise*.
- (6) バザンはこのフェスティバルで自作を指揮したが、その直後倒れ、還らぬ人となった (*Dictionnaire de la musique en France*)。ちなみに芸術アカデミーのバザンの席を受けついだのは若きマスネであり、彼はまたバザンからパリ音楽院の作曲科の教授の席も受けついだ。
- (7) 作家、政治家。普仏戦争に従軍し、その後『兵士の歌』を出版。1882年「愛国者同盟」を結成した。
- (8) 注目された団体としては、*la fanfare Delattre*, *la fanfare de Roubaix*, *l'Harmonie de Roubaix*, *la fanfare des manufactures de Chauny*, *la fanfare Gravillaise du Havre*, *les musiques municipales de Reims et Mans*, *l'Harmonie du Bon Marché* などであったという (*RGMP* の記事による)。
- (9) 公式報告書には19日と記載されているが、誤りである。また、参加団体は8つの団体（うち、ベルギーが3団体、スイスが1団体）と記載されている。